

## 韓国の大学における学生支援の 状況について

三谷 卓也

(在大韓民国日本国大使館 一等書記官)

はじめに

本稿では、ソウル及び近郊のいくつかの大学を例に、韓国の大学における学生支援の現在の状況について報告したいと思う。

なお、本稿をまとめるに当たっては、ソウル大学、高麗大学、延世大学、梨花女子大学、中央大学(以上ソウル市)、仁荷大学(仁川市)、白石大学(天安市)のソウル及びその近郊の七大学(うちソウル大学のみ国立大学で他は全て私立大学)を筆者が直接取材した結果を基にするものであり、政府の政策よりも現場の担当者の生の声から聞こえて

くる現状を報告するものであることを、あらかじめご了承ください。

### 一 最近の大学生の状況

さて、最近の韓国の学生の状況であるが、元々韓国は日本より教育熱は高かったが、高等学校の平準化政策により、事実上大学修学能力試験一回で全てが決まってしまう受験制度と、後述する就職難をも一因とするブランド志向により、かなり教育熱が沸騰している状況にある。

実際、幼稚園に入る前から習い事に通わせる親も多く、

子どもたちは学校の授業後も塾の掛け持ちをしたり（韓国は日本の塾と異なり、英語なら英語用、数学なら数学用と科目ごとに異なる塾に行くケースも多く、必然的に掛け持ちとなる）、家庭教師を利用したりする例もかなり多い。さらには、「自由学級」「放課後学校」と呼ばれる学校の教室開放（小学校～高校まで全ての段階で実施されている）を利用したりすることにより、子どもたちの帰宅時間が夜九時を過ぎることは多々あり、修能試験前の高校生では深夜0時まで学校を開放し、生徒たちに自習をさせることもままあるそうである。

この結果、親の過保護と小さい頃からの競争による個人主義的な子どもが多くなる反面、ストレスと対人関係の弱さから来る脆弱性があるというのが、最近の大学生についての大学の学生支援関係者の共通した見方である。

## 二 学生相談

このような状況のため、相談室での相談件数も、多い大学で年間四〇〇〇件（延世大）～五三〇〇件（梨花大）とかなり多くなっている。

その内容も、修学や進路といった問題もさることながら、

適応や他者との関係に係る事項がかなり多いのが最近の傾向である。特に同じ大学にいる〓同じ環境なのに、親の地位や社会的な評価、小遣い、成績等の点で他者と比較して自分は疎外されていると感じてしまうことが多いとのことであった。

加えて、内容的にも深刻化する傾向にあり、親に言われるまま受験し名門大学に入学したものの適応できずに退学していく例や、中には自殺にまで短絡的につながってしまった例も増えており、ソウル大では、自殺を考えたことがある者が一〇人中三～四人という調査結果もあるとのことであった。

このような状況に対応するため、学内外の関係機関との連携はどの大学でも概ね良好であるものの、相談部署と教員との連携については、相談員の考え方によって、比較的早い段階から教員と連携を図ろうとする大学（梨花大等）と、教員との連携は内容を良く見極めてできるだけ最終段階にという大学（中央大等）と、かなりの差違が見られた。

また、相談員の数も大学によって差違があるが、専門の相談員を補う形で、専門課程の大学院生をイン턴として活用している大学も見受けられる。

## 三 修学支援

最近では、日本でも多くの大学でチューター・サポーターなどと呼ばれる、上級生が下級生の学習や学校生活を支援する制度が定着しているが、韓国においても「メンソリン」と呼ばれて多くの大学で実施されている。おもしろいのは、その多くが奨学金や単位と結びついており、下級生の指導を行う「メンティ」「メンター」と呼ばれる上級生のインセンティブとなっていると同時に、彼らを選抜する際に厳しい選考を行う理由づけともなっている。

奨学金という点では、多くの大学で「勤労奨学金」という制度を設けているのが日本ではあまり見られない制度である。これは、学生支援関連部署や図書館等で、学生対応や単純な事務作業を行わせる代わりに一定の額（一時間四〇〇～五〇〇ウォン。大学生の一般的なアルバイト代とほぼ同額か若干高め。）を「奨学金として」支給する制度で、かなり昔から一般的に行われている。アルバイトとの差違を確認したところ、学内でアルバイトを雇うとは公然とは言えないことから（大学はもちろん場合によっては学生自身もアルバイトより勉強が重要と当然考えるため）、

奨学金という名目でこのような制度を行っているという回答が多かったが、中には、勤労奨学金という制度を廃止し、学内イン턴シップとして同様な作業をさせている大学もあった（高麗大・梨花大）。

また、韓国の学生は、長期短期の留学・海外研修志向がかなり強く、大学としても様々な支援を行っているが、中には高麗大学や延世大学のように、大学側でテーマ（例えば「海外大学の学生支援」等）を設定し、学生の視点でベンチマーキングさせ、その成果を大学としても積極的に活用していこうという大学の経営戦略に学生支援を組み込むという、より積極的な運用を行う大学もあり、実際、職員が学生の研修成果を参考にして新たな取組を展開している例もあるとのことであった。

## 四 就職支援

韓国では、現在かなり深刻な就職問題が生じている。二〇〇七年卒業者の場合、全体の就職率は六八%と低いばかりでなく、正社員として就職できた者は四八・七%、しかも昨年（四九・二%）に比べて悪化している。

このため、少しでも有利なようにと、あえて卒業せずに

学生の身分のまま就職活動を行う者も多く、ある就職情報関連企業の調査結果によると、二〇〇五年に四年制大学を卒業した学生の平均在学年数は五・一年（男子七年（徴兵期間（最も一般的な陸軍で二四ヶ月）を含む）、女子四年七ヶ月）であり、この数値は年々増加傾向にある。

こういった状況のため、学生にとってはもちろん、大学にとっても就職問題は重くのしかかっており、各大学において急ピッチで支援体制・制度が整備されているところがある。

特に、地方の大学にとっては就職問題が死活問題となっており、中央の有名大学に対抗するためにも様々な取組が行われているのは、日本と同じである（ちなみに日本の各種雑誌で行われているような「就職ランキング」は韓国では無く、日本の話をする担当者は一様に興味を示していた）。

実際、筆者が赴任した二年前には、日本では一般的に行われている企業説明会、個別企業相談会等について、「名門だから不必要」と実施していなかった大学においても、今回の取材時には個別企業相談会を開催していたなど就職に関する取組は各大学でかなり進みつつあり、各種セミナー、就職情報提供、エントリーシートや面接指導、若年時から

である。本制度についての影響を聞いてみたところ、一様にメリットの方が大きいとの回答であった。

すなわち、学生の脆弱性が問題になる中で、やはり兵役を経験することにより、精神的にも肉体的にも強くなる、組織や集団生活・命令系統等を理解し、社会性が身につくなどの点をメリットとしてあげている。他方デメリットとしては、やはり学問的（教育的）な断絶、就職の遅れなどのほか、多くは二年終了時に行くため、「一・二年生の時には勉強よりも遊び（修能試験からの解放という面もある）、兵役後に本格的な勉強」と考えている学生も多いという点を挙げる担当者もいた。ただし学生たちの意見としては、女子学生たちは上記と同様の見方をしている一方、当の男子学生たちは「仕方ないから行く」「義務でなければ…」と忌避感を持っているというのが正直なところである。

## おわりに

以上、簡単に韓国の大学における学生支援の状況を見てきた。本稿が掲載されるころには、すでに李明博（イ・ミョンバク）新大統領の就任式も終わり新政権が発足しているであろう。この新政権は、大学入試制度の抜本的な見直し

のキャリア教育、相談員の配置等々日本で行われているような取組は、韓国の大学でも急ピッチで実施されている。

特に最近では、就職活動時に「インターン」「アルバイト」「資格」「受賞歴」「ボランティア活動の記録」という五つの経歴が載った履歴書が必要だという意味から、「就職五点セット」という言葉も聞かれるようになり、学生がこれらに取り組む際、どう大学として支援するかが課題となっている。

さらには、最近、就職時に英語能力（特にTOEICのスコアより会話・英語でのプレゼンなど実践力）を重視する会社が増えており、学生の間では「五点セット」に加えて海外への語学留学も必須という認識が高まっており、やむにやまれずという点はあるにせよ、海外留学に対して躊躇しないという点は日本の学生にも見習って欲しいところである。

なお、近年韓国技術大学に就職相談コースという博士課程の就職相談専門家養成課程ができ、就職相談の専門資格が取得できるようになったとのことである。普及状況も含め、この資格の今後の状況については、要チェックであろう。

ところで、韓国の大学生でかなり大きな問題が徴兵制度

を初め、多くの事項を抜本的に見直していくことを表明している。加えて、日本よりも厳しい少子化や就職難、国立大学の法人化や大学間競争の激化など大学を巡る状況は引き続きかなり厳しいものがあり、経営戦略の面からも学生支援（特に就職支援）のあり方がダイナミックに変わっていく可能性がある。

その点からも、韓国の大学における学生支援の状況はまさに「これから」であることを指摘して、本稿を終えることとしたい。